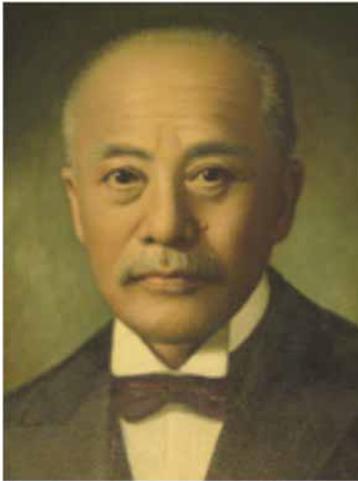


呉文聰 くれ あやとし

(1851～1918)

## MENU

- 1 呉文聰の国勢調査法律私案
- 2 統計即ち呉・呉即ち統計…！
- 【エピソード1】呉文聰と福沢諭吉
- 【エピソード2】呉文聰とグリム童話



嘉永4年（1851年）、蘭学者の父黄石の次男として、江戸の青山で生まれ、渡辺魯輔の下で漢学、箕作麟祥みつくくりんしょう（いとこ）の下で英語を学び、大学南校を経て明治3年（1870年）に慶應義塾に入るが、1年足らずで退塾。その後、明治8年、太政官正院政表課に勤め、近代統計の祖とも言われる杉亨二の下で統計学を学び、内務省（明治13年～15年）、農商務省（明治26年～29年、明治33年～大正2年（1913年）農商務省統計課長）を始めとする官公庁に勤務。

また、官公庁に勤務する傍ら、開成学校（後の東京大学）、東京専門学校（後の早稲田大学）、慶應義塾などで講師として統計学の教鞭をふるう。

著書には『統計詳説：一名社会観察法 上』、『応用統計学』、『統計原論』、『統計学 完』、『理論統計学』、『統計実話』、『純正統計学』、『戦後経営 人口政策』、『実際統計学』、『産業統計講話』がある。また、ドイツ社会統計学派などの文献の翻訳と紹介に努めた。

【参考資料】：Bibliographical Database of Keio Economists、国立国会図書館デジタルコレクション、【写真】：総務省統計局HP

## 1 呉文聰の国勢調査法律私案

（本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.11」を基に作成）

## 1 人口センサス（甲斐国現在人別調）との出会い

明治12年（1879年）に山梨県においてわが国で最初の近代的な手法による人口調査である「甲斐国現在人別調」を杉亨二とともに携わりました。杉亨二との出会いが呉文聰をして人口センサス（国勢調査）の実現のための活動を精力的に展開する原動力になったと考えられます。

2 米の第12回人口センサスの視察と国勢調査実現のための働きかけ<sup>1</sup>

明治28年（1895年）12月、スイスのベルンで万国統計協会の会議が開催され、「各国が1900年に人口センサスを行う議決」がなされ、スイス連邦統計局長ギュイヨームから、内閣統計課に、書簡が届き、1900年の世界人口センサス（国勢調査）への日本の参加の勧誘<sup>2</sup>もあり、これを受けて、国勢調査実施の件で同志とともに衆議院へ運動を行いました。そのこともあって、国勢調査建議案が衆議院を通過しました。日本政府は、農商務省にいた呉文聰を内閣統計局審査官に兼任させ、明治33年（1900年）5月から半年間米欧へ出張させました。米の第12回人口センサスと英、仏、独の統計の状況を視察しました。帰国後、呉文聰は「国勢調査法律私案」

【参考1】を作成し、明治34年、東京統計協会の10月定期会に諮り、可決され、この案は、徐々に修正を加えて完全なものにすることとなりました。東京統計協会（会長：阪谷芳郎）としては、周期は5年か10年か、第1回は明治38年か43年かの論点があり、法案化に際しては、この観点からの修正もあり得ると想定していたと考えられます。

3 「国勢調査二関スル法律」の制定に向けた働きかけ<sup>3</sup>

呉文聰の国勢調査法律私案が東京統計協会でも可決されたことを受け、阪谷芳郎（明治34年（1901年）から同協会の会長で大蔵官僚、明治35年には大蔵次官）は、政府部内をまとめ、ときの多数政党である立憲政友会に働きかけ、同党衆議院議員内藤守三外10名から明治35年2月「国勢調査二関スル法律案」を議員立法で提出することが実現し、同年2

<sup>1</sup>【参考資料】 島村史郎「日本統計史群像」、横山雅男「国勢調査問題と我が東京統計協会」（統計集誌第359号）

<sup>2</sup>【参考資料】 藪内武司「日本統計発達史研究」、島村史郎「日本統計発達史」

<sup>3</sup>【参考資料】 宮川公男「統計学の日本史」、藪内武司「日本統計学史における呉文聰」（関西大学経済論集）、林茂淳「国勢調査について」

月に衆議院、同年3月に貴族院の可決を経て成立し、同年12月に「国勢調査ニ関スル法律」が公布されました。

#### 【参考1】 吳文聰の国勢調査法律私案<sup>4</sup>

明治三十四年十月二日定期会に於て吳文聰君の發議に依り国勢調査法律私案を左の如く決し

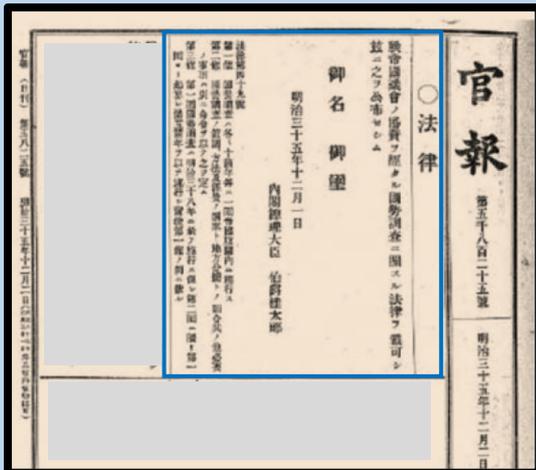
##### ● 吳文聰の国勢調査法律私案

- 一 国勢調査は明治三十八年を以て第一回とし爾後五年帝國版図に施行す
- 二 第一回は小調査(人口に関する諸事項より職業に迄及ぶ)第二回は大調査(小調査の項目は勿論經濟上に関する諸事項等所謂米国流に類するもの)を施行すべし爾後交互に此の例に依る
- 三 調査の範圍並方法費途負担の区分其他必要な規定及台湾に於て施行すべき時期は命令を以て之を定む

右案は漸を以て修正完備することと為せり

#### 【参考2】 国勢調査ニ関スル法律(明治35年法律第49号)【制定時】

○明治35年12月2日付け官報(国立国会図書館デジタルコレクション)



##### ポイント

- ・ 国勢調査は10年ごとに実施
- ・ 国勢調査の範囲、方法及び国庫と地方分担との割合は別に命令で定める
- ・ 第1回国勢調査は明治38年に施行。ただし、第2回は第1回の5年後に施行

#### 4 国勢調査に関する法案の可決を喜んで口ずさんだ短歌

吳文聰は、「国勢調査ニ関スル法律案」の可決を喜び、次の

ように口ずさんだとされています。<sup>5</sup>

年寒く 春まだしもと 思ひしに

嬉しくも聞く うぐいす こえ  
鶯の聲

ただ、「国勢調査ニ関スル法律」は明治35年(1902年)に公布【参考2】され、明治38年に第1回調査を実施することとされましたが、日露戦争などのため実施は見送られました。我が国で初めての国勢調査が行われたのは、吳文聰が死去した2年後の大正9年(1920年)でした。吳文聰と杉亨二が国勢調査実施のための試験調査として行った「甲斐国現在人別調」の41年後のことでした。

宮川公男は、その著書「統計学の日本史」において吳文聰を「国勢調査創始の功労者」と称していますが、吳文聰の国勢調査の実現のための功績を調べれば、調べるほど、これ以上、適切な表現はないと実感しました。

## 2 統計即ち吳・吳即ち統計…!

(本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.27」を基に作成)

### 1 叙勲関係文書にみる吳文聰の功績

叙勲関係文書における吳文聰の功績の要旨は次のとおりです。

- ・ 農商務省統計課長として産業統計の改善を図る
- ・ 中央及び地方に統計講習会の講師を行い統計の進歩発達に貢献
- ・ 国勢調査の必要性を訴求し大正9年の第一回国勢調査の実現に貢献

#### 【参考】 吳文聰の叙勲の受章履歴<sup>6</sup>

- ・ 明治34年(1901年)06月 勲六等に叙せられ瑞宝章を授典
- ・ 明治40年(1907年)12月 勲五等に叙せられ瑞宝章を授典
- ・ 大正07年(1918年)09月 勲四等に叙せられ瑞宝章を授典

### 2 吳文聰の功績を記した叙勲関係文書<sup>7</sup>

吳文聰が大正7年(1918年)9月に勲四等に叙せられるに際しての叙勲裁可書における同人の功績を記した部分は、次のとおりです。同文書において「目下病氣危篤の趣に付、前

<sup>4</sup> 横山雅男「国勢調査問題と我が東京統計協会」(統計集誌第359号)

<sup>5</sup> 【参考資料】 林茂淳「国勢調査について」(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/955775>)

<sup>6</sup> 【参考資料】: 国立公文書館デジタルアーカイブ、「杉亨二自叙伝」(国立国会図書館デジタルコレクション)

<sup>7</sup> 国立公文書館デジタルアーカイブ「吳文聰叙勲ノ件」

功を録し、勲四等に叙し、瑞宝章を授けられ<sup>たく</sup>度」とあり、生前に手続きが進められ<sup>(農商務大臣からの上奏は同年9月7日付け)</sup>、逝去の日<sup>(同月19日)</sup>に施行されました。ちなみに、その1週間後、国勢調査施行令(大正7年勅令第258号)が官報に公布され、第1回国勢調査の実施は大正9年10月1日と定められました。

【叙勲裁可書】<sup>(筆者が原文のカタカナをひらがな表記にし、旧字体はできるだけ新字体にし、句読点、ルビ等を付しました。)</sup>

従五位勲五等吳文聰儀明治初年官府に出仕以来統計事務に<sup>えら</sup>従事し、明治三十一年農商務省に統計課をするや選まれて同省属に任ぜられ之が課長と為り、同三十三年四月内閣統計局審査官を兼任し、<sup>つい</sup>尋で<sup>(次いで)</sup>統計事務官に任ぜられ、大正二年六月十二日官制改正に依り廃官となり、爾来囑託員として統計に関する事務取扱に<sup>おうしょう</sup>鞅<sup>(忙しく働くこと)</sup>掌せり。其統計課長に就任以来二十年、専心、産業統計の改善を図り従来年々発刊せる農商務省に英文対訳を付し、以て外国人の閲覧に<sup>たより</sup>便にし、又常に統計教育の必要なるを唱導し、中央及び地方に統計講習会の開催を促し、且之れが講師に聘せられ講習に従事すること数十回。今ま地方及中央に於ける統計事務の大に進歩発達を為したるは本人の<sup>ろうこう</sup>労効<sup>(多年にわたる経験や功績)</sup>大なりと謂ふべし。又国勢調査の必要なるを認め、言論に文章に之を論じ、遂に大正九年に於て帝国全版図に亘り国勢調査執行の計画を見るに至りたる等其功績顕著なる者に<sup>そうろうところ</sup>候<sup>(であります)</sup>處、目下病氣危篤の趣に付、前功を録し、勲四等に叙し、瑞宝章を授けられ<sup>たく</sup>度、此段、<sup>いんさい</sup>允裁<sup>(決裁を頂く)</sup>を仰ぐ。

て「講義に著訳に<sup>じんすい</sup>尽瘁<sup>(自分の労苦を顧みることなく、全力を尽くすこと)</sup>」された結果は、遂に世人をして「統計即ち吳・吳即ち統計」と評判せしむるに至りました。この誉れは人<sup>じんしゃく</sup>爵<sup>(人から与えられた爵位・官位など)</sup>より数層尊いものと存じますから官界に不遇なりしを償ふて余りありといふべきでありませう。」とされ、宮川公男は、その著書「統計学の日本史」において吳文聰を「日本の統計理論のパイオニア」で「国勢調査創始の功労者」と称しています。これらの文献からも統計の理論と実務の分野における吳文聰に対する高い評価の一端をうかがい知ることができます。

### 3 吳文聰の統計愛

叙勲関係文書からも吳文聰の統計愛の一端をうかがい知ることができますが、彼は、叙勲関係文書で挙げた3点の功績(①産業統計の改善、②統計講習会での講義、③国勢調査の実現への尽力)にとどまらず、賃金統計の改善、欧米の統計学の研究、統計学に関する多くの著書の刊行や論文の発表、大学で統計学の講義、東京統計協会の機関誌「統計集誌」の編纂を行うなど、我が国の統計の学問と実務の発展に多大な貢献を果たしたといえます。

吳文聰の功績は、藪内武司「日本統計学史における吳文聰」に詳しく論じられています。その論文の冒頭で「わが国統計学の先駆者をたずねるとき、杉亨二と吳文聰の二人を語らずして日本統計学史を描きえない」としています。また、吳文聰氏追悼会(13回忌)における横山雅男の開会の辞<sup>8</sup>におい

<sup>8</sup>「統計学雑誌 第534号」(昭和5年<sup>1930</sup>年12月)所収

## 【エピソード1】 呉文聰と福沢諭吉

(本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.11」を基に作成)

慶應義塾時代(明治3年(1870年))のある日、呉文聰は、福沢諭吉から学風に合わないと言われ、約1年後、退塾。いまの慶應義塾大学の学風とは異なり、当時は、おしゃれな人は学風に合わないとして退塾を命じられたようです。呉文聰ばかりでなく、約10人ばかりの塾生が、退塾することに。現代なら想像できないことです。その後、慶應義塾の講師を依頼され、明治31年から大正5年(1916年)まで、統計学の講義を行った。その頃の慶應義塾の人は、都下第一の洒落者というふうになっており、これも奇なことの一つであると回顧しています。<sup>9</sup>

### ◆福沢諭吉と呉文聰のやりとり(会話形式にアレンジ)<sup>10</sup>

福沢諭吉



退塾してくれ

呉文聰



どういう訳でございましょうか

福沢諭吉



君はふだん柔らかい(おしゃれという意味)着物などを着ているが、そういうことは、塾の風儀に関係するから...

呉文聰



それなら以後そういうことのないようにするので、置いてください

福沢諭吉



塾のことは私の一了簡(独断という意味)に行かぬ、君と私はフレンドであるから、(塾に)来てもよろしい、今までどおり交際してよろしいが、塾に居ることだけはよしてくれ

## 【エピソード2】 呉文聰とグリム童話

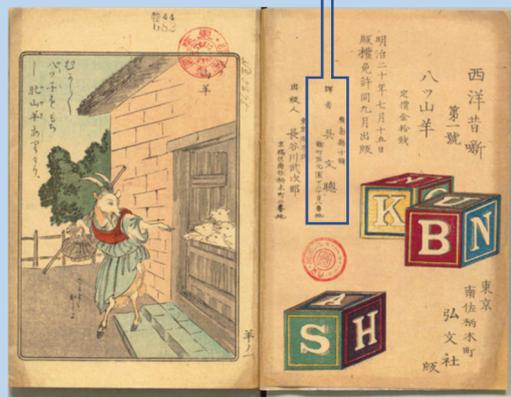
(本稿は「統計図書館ミニトピックス」への掲載を目指し、書き溜めていた記事を基に作成)

明治20年(1887年)、グリム童話「狼と七匹の子やぎ」を訳した「**ハツ山羊**」が出版されました。大淵知直「呉文聰とグリム・メルヘン」によれば、翻訳したのは、統計のパイオニアである呉文聰だそうです。呉は、英語に堪能であったほか、ドイツ語も習得し、ドイツ社会統計学派などの文献の翻訳と紹介に努めたことは知られていましたが、統計の文献の翻訳のほか、童話の翻訳も行っていたことは意外でした。しかも、ドイツ語を学びたての頃であり、腕試しの翻訳かもしれません。<sup>11</sup>

### 「ハツ山羊」



「訳者 呉文聰」



【画像】：国立国会図書館デジタルコレクション

【余談】上記書籍は明治20年7月に出版され、同書に表記の呉文聰の住所は、統計集誌第16号(明治15年12月出版)及び統計集誌第76号(明治20年12月出版)に所収の東京統計協会会員姓名録並びに農商務省職員録(明治27年5月現在)に掲載の呉文聰の住所と一致していました。

(注) 統計集誌は会員限定配布、農商務省職員録は非売品

<sup>9</sup> 【参考資料】 宮川公男「統計学の日本史」、「呉文聰著作集第三巻」

<sup>10</sup> 【写真】 福沢諭吉：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」、呉文聰：総務省統計局HP

<sup>11</sup> 【参考資料】「呉文聰著作集第三巻」、大淵知直「呉文聰とグリム・メルヘン—日本昔話になった「狼と七匹の子やぎ」(三田評論No.1245(2020年6月号)所収)(⇒「明治19年から20年の頃には、統計学を究めるためには英語のみでは足らぬと思いたち、ドイツ語の習得に打ち込む。「書生と云ふ年齢ではなかったが」「専心独逸学を勉強」したと述懐している。)」とされています。)、Bibliographical Database of Keio Economists (⇒呉文聰の年表(明治20年)で、「この頃、私塾に通ってドイツ語を学ぶ。」とされています。)。ただ、藤本芳則「呉文聰」によれば、呉の「ハツ山羊」は、ドイツ語の原書を和訳したのか英語の訳書を和訳したのかは定かではないようです。